

## 葉名尻竜一 学位（博士）論文審査報告書

### 論文題目：文学における〈隣人〉

—寺山修司から、野田秀樹、平田オリザまで—

本論文は、短歌・俳句の創作から演劇運動、映画制作、評論活動など多方面にわたって活躍しながら 1983 年に 47 歳の若さで没した作家・寺山修司に焦点を据え、その寺山と何らかのかかわりをもった歌人や劇作家たちとの繋がりを多面的に取りあげ、それぞれの関係を浮き彫りにしながら寺山修司という人間と文学・芸術状況とを論じた論文である。その全体は、ここ 7、8 年のあいだに学会誌などに発表された論文に未発表論文を組み合わせてながら纏められている。そのために一瞥したところでは論文集といった印象をもつが、全体像としては、ゆるやかに展開しながら連続してゆく人と人との繋がりや、作品と作品との共振関係が企図されており、博士論文としての十分なまとまりが果たされている。

本論文ではタイトルにも見られる「隣人」という語がひとつのキーワードとなっているが、この概念は、文学史的に定着したものではなく、葉名尻氏が自らの研究のなかで見いだした概念である。そして、その語の発見は、氏自身のことばを借りるならば、「二〇一一年の東日本大震災へと遡る」ものであり、「未曾有の震災に直面し、その後、なかなか進まぬ復興にともなって、地域が分断され、人間関係に深い亀裂が生じるなか、多くの文学研究者が文学研究を省みたように、『文学』の意味を問い直さざるを得な」かったという現在の状況のなかで見いだされたのであった。意図するとしないとにかかわらず、人は繋がりのおかげでしか生きられないのは当たり前のことだが、それは文学や演劇といった創作の現場においても変わりがないし、寺山修司の場合には、それがきわめて方法的なかたちで表れているということを、葉名尻氏は丹念な調査による新たな資料の掘り起こしを踏まえるなどしながら行っている。そしてそれは、野田秀樹や平田オリザという寺山のあとを継ぐ劇作家たちにおいても同様に見いだせるのである。そしてまたそこには、葉名尻氏が自らも学生時代に演劇活動を行っていたという体験ともリンクしているというふうにいうことができるに違いない。

博士論文の全体は 13 の章から構成されているが、その全 13 章は大きく三部に分けられており、寺山修司の短歌を軸に据えて、寺山を見いだした中井英夫、寺山の短歌に影響された岸上大作、寺山と詩劇グループを結成していた嶋岡晨との様式論争などを取りあげた第一部、坂口安吾「桜の森の満開の下」を介在させながら、劇作家としての寺山修司と劇作家・野田秀樹、そして坂口安吾の師である小説家・牧野信一などとの繋がりと広がりのおかげで論を展開する第二部、同じく劇作家として現在活躍する平田オリザにおける寺山修司とのつながりを論じた第三部、という構成である。

さて以下には、収められた各章の内容にふれながら論文の全体を概観してみたい。

第一章は寺山修司への導入とも言える章で、ライトミステリー小説『ビブリア古書堂の事件手帖 5』（三上延著）を手がかりとして、そこで取りあげられた寺山修司の第一作品集『わ

れに五月を』の草稿原稿に見いだされた書き込みの「抹消」とその「上書き」という（架空の）事件に触発された葉名尻氏は、三上作品における「消して上書きする」という行為にこそ、寺山修司を理解するために必要な視点があるのだと指摘する。そして、寺山が彗星のごとくに歌壇に登場することになった最初の連作短歌が、『短歌研究』の編集長であった中井英夫によって、投稿された連作短歌の一部「抹消」と題名の「上書き」によって登場したことを論じてゆく。その上で葉名尻氏は、小説の世界だけではなく、寺山修司研究においてもさまざまな未解明部分があり、抹消と上書きを一つのキーワードにしてそれを解き明かしてゆこうとする。

第二章と第三章は連作として読むことのできる論文である。そこでは、寺山の短歌作品の代表作ともいえる「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」という一首をめぐる論考になっており、きわめてスリリングな論述が展開する。具体的にみてゆくと、高校国語教科書に取りあげられることの多いこの一首が、教室ではどのように読解されているかを確認し、続いて、小池光をはじめとした歌人や評論家による読みを批判的に検討した上で、当該歌が、初出時から少しずつ体裁を変えながら何度も本や雑誌に再掲載されてゆくことを、丹念に追いかける。そして、その行為が、寺山修司がしばしば用いた技法「コラージュ」を意図したものであることを明らかにしてゆくのである。

その結果、この一首は、前書きが書き換えられ選歌の方向性が変わってゆくなかで、連作がイメージさせる舞台も、レジスタンスの活躍した西欧からアジアへと移っていることを指摘する。そして論の後半（第三章）においては、葉名尻氏が新たに見いだした新資料などを使いながら、「マッチ擦る」の一首が、「コラージュ」ではなく実体験によって制作されたというふうに寺山自身が装っているらしいことが明らかにされてゆく。そしてそこには、1958年に生じた小松川事件と呼ばれる衝撃的な女子高生殺しにおいて、犯人とされた在日朝鮮人に対する差別問題が背景に埋め込まれていることを読み解いてみせるのである。この時期の寺山の文章にしばしばみえる朝鮮人の名前を足掛かりにした説明は、証拠として出された新資料によって裏付けられており、きわめて有効な読みを提出しているものと考えられる。

なお、ここに収められた論文は雑誌などには未発表の長編論考であるが、寺山修司学会での口頭発表において高く評価された内容で、近く同学会の機関誌に一括掲載されることになっているらしい。おそらく、当該分野の研究者には衝撃をもって受け入れられるのではないかと思われる。

続く第四章と第五章では、歌人としてデビューした寺山修司が、ラジオドラマや映画のシナリオなどさまざまなジャンルを越境しながら創作活動を展開するなかで、国際的な評価を得るきっかけとなった劇団「演劇実験室『天井桟敷』」がはじまる。しかし、寺山の演劇活動はそこが出发点ではなく、その前に、詩劇グループ〈鳥〉の活動があり、それが研究者には忘れられていることを指摘し、そのメンバーであった詩人の嶋岡晨（本論文の副査）と寺山とのあいだでなされた前衛短歌論争の〈様式論争〉を含めて、その意味を問うている。

そして、その論争と演劇活動は、お互いが持つ詩精神（ポエジー）の違いによって生じているのだということを論じてゆく。

次に置かれた第六章と第七章も、一連の論文であり、若くして自らの命を断った岸上大作という学生歌人と寺山修司との関係が論じられる。すでにふれたように、寺山修司は自らの作品を、しばしば「コラージュ」という手法を用いて制作した。そして、岸上大作には、寺山の作品を「コラージュ」して制作したと思われる短歌がある。それは、「意思表示せまり声なきこえを背にただ掌（て）の中にマッチ擦るのみ」という代表作である。

この短歌をどのように読むかはさまざまに議論されており、その解釈のポイントとしてあるのは「声なきこえ」という句の理解なのだが、葉名尻氏はそれを、1960年代という安保闘争の時代なかで、その時代に翻弄される一人の学生の思いとして考えてゆく。いうまでもないが、この短歌は、先に引用した寺山修司の代表作「マッチ擦る」を踏まえて作られているのは明らかだ。そしてまた、マッチ擦るという句は、石川啄木『一握の砂』に収められた短歌「マッチ擦れば二尺ばかりの明るさの中をよぎれる白き蛾のあり」へと溯るものであることを述べ、そうした流れのなかで岸上の歌を解釈するとともに寺山と岸上との関係を、岸上の評論「寺山修司論」に基づきながら論じてゆく。

以上の第一部のあと、第八章から第十二章では、寺山修司と野田秀樹との接点がテーマとなっている。野田秀樹は、学生時代に結成した劇団「夢の遊眠社」の演劇活動で有名になったが、その公演を晩年の寺山修司は観て、批評も書いている。その演劇批評に基づいて、両者のつながりについて眺めてゆくことで、共通するキーワード「少年」を引き出し、その上で、寺山の短歌「ころがりしカンカン帽を追うごとくふるさとの道駆けて帰らむ」を分析するのが第八章である。また第九・十章では、デビュー間もない頃、坂口安吾の生まれ変わりを自称していた野田秀樹が、安吾の小説「桜の森の満開の下」を演劇にした作品「贗作 桜の森の満開の下」を作るが、その作品をめぐる葉名尻の論考は展開する。

坂口安吾の小説「桜の森の満開の下」と同じく安吾作品「夜長姫と耳男」はどちらも短編小説だが、この二作品はしばしば一連の作品として扱われ、とくに、そのなかに描かれたショッキングでグロテスクな〈首遊び〉のシーンが、常に考察の対象となってきた。野田秀樹のほかにもさまざまな集団によって演劇作品として上演されているが、そこにみられる〈首遊び〉のシーンの演出を踏まえて、書かれた文字による文学研究とは異なった演劇的な読解の可能性を探ろうとしている。それは寺山修司がジャンル横断的にさまざまな表現に向き合ったことを理解する上でも、文学が文学だけではなく他のジャンルとのせめぎ合いのなかで活性化されているということをも、必要な方向だと言えるのである。そしてそれは、葉名尻氏自身が学生時代に演劇活動に熱中していたという体験にも根ざしているとみることができる。

第九章において安吾の小説と劇作との関係、ことに〈首遊び〉について論じた上で、第十章では野田秀樹が演劇作品「贗作 桜の森の満開の下」によって描こうとした世界を解きあかそうとする。そして、野田によって脚色された大仏の首の切り落としという演出にみられ

る、天皇制の問題や政治の問題を解明しようとする。それはまさに 1980 年代という時代状況を反映しており、また 1989 年という時代のなかで、野田秀樹が坂口安吾から継承した問題意識とは何であったかということを知りたくのである。

また、第十一・十二章においては、葉名尻氏自身の「桜の森の満開の下」の脚色体験を踏まえて「女」と「鬼」との関係、小道具としての〈面〉の表象などに基づいて、安吾の小説がかかえる「主体」について考察し、坂口安吾の師である牧野信一の小説についても考察する。そして、牧野が抱えた文学的な問題と安吾の文学的な問題との繋がりが明らかにされてゆく。

最後に置かれた第十三章では、1960 年前後から始まる小劇場運動における第四世代（寺山修司が第一世代、第二世代がつかこうへい、第三世代が野田秀樹）に位置づけられる現代の劇作家・平田オリザを取りあげる。そして、彼が寺山修司について言及したエッセイを手がかりにしながら、「アンガラ演劇」と評された寺山が前世代の何を批判して演劇を始めたのか、また、「静かな演劇」と評された平田が何を批判して演劇活動をしているのか、その演劇論を比較考察しながら、「近代リアリズム」の問題を考える。

現在、工学者と組んで「ロボット演劇」を上演し続けている平田オリザを、葉名尻氏が本論文のひとまずの締めくくりにもってきたのは、「ロボット演劇」という問題が、牧野信一の小説から坂口安吾の〈肉体〉へ、そして寺山修司の〈私〉へと連ねることのできると認識しているからである。しかし、それによって本論文が完結したというのではなく、この論文から新たな問題意識が掘り起こされて、寺山修司という作家への言及は今後もなされるはずだが、その尽きざる繋がりと連鎖のひとまずのまとめとして本論文は学位請求論文として提出されたとみるのがよいのである。おそらく、近いうちに本論文は一冊の著作として公刊されるはずであり、それは寺山修司研究はいうに及ばず、近現代文学研究や演劇研究において、注目を集めることになるであろう。

以上述べてきたところから、本論文が博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格をもつと認められるということを知りたく。

平成 28 年 2 月 25 日

主査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻  
教授 三浦 佑之

副査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻  
教授 島村 幸一

副査 立正大学元教授

嶋岡 晨